

ゾンビ・セグメントと電気機器産業

2016年4月

猿山純夫

日本経済研究センター・法政大学

胥 鵬

法政大学経済学部

要 旨

2000年代に入って銀行の不良債権問題が解決し、一部のゾンビ企業は健全化したが、日本経済全体は低い成長を続けている。これは、2000年代以降のもう一つの「失われた10年」に、長期的・構造的な原因が隠れていることを示唆する。本論文は、電気機器産業のセグメントデータを用い、セグメント別投資の決定要因を推計することで、長期低迷を解明する手がかりを得ることを目的とする。

確認できたのは、以下の点である。当該セグメント（自部門）と他部門のキャッシュフローに注目すると、両方が赤字で会社全体が赤字の企業では、各部門の赤字が増えるほどセグメント別投資（資本的支出）が増加する傾向がある。自部門が赤字、他部門が黒字の場合は、自部門の赤字と他部門の黒字が大きいほど、投資が拡大する。こうした「ゾンビ・セグメント」の過大投資や他部門の黒字に頼った「内部補助」が、特にリーマンショックに襲われる前の2007年度まで著しかった。